

目次

集 卒業生を囲んで

・西川義永
・梶浦博一

品 編

「火き火」
「新しい季節」
「ハインとマルクス」
「あるハンボリのつぶやき」
「イタチのたわごと」
「井の中り思案」
「冬 - '69」
「みんな夢の中」 - M氏の
チ紙
「場と川もの」
「サイコロジ」
「支離滅裂」
「本居宣長と和」
「忘摩」
「何人の為に」
「自然が欲しい」

研究 編

「桶狭間古戦場の謎」

特別寄稿 「郷土研究会に寄せて」

計報

郷土研究会 一年の歩み

梶浦博一
池田 全
平野善敏
百瀬敏雄
平田 雅司
水野 猛
杉浦 孝和
水野 猛
伴 金美
西川 洋
北川 良二
堀井次雄
堀井次雄
青山 博美
高木 義明

西川 洋

結成陸郎

堀井次雄

青山 博美

のすたるじす

No. 7

特集

卒業生を囲んで

名古屋大学
郷土研究

◎特集

卒業生を囲んで

大学四年間をすごした梶浦・西川両先輩に、思いのまま自由に語ってもらい、特集としました。色々とお過去のエピソードが、両先輩の口を通して明らかになるのではなにかと思います。なお以下の会話は、終始笑いの包つまれたもので、テープにすべて集録されています。そして、これを我々に対する記念品の一つとして、永く保存したいと思います。

初めての企画でしたが、両先輩に積極的にもりたててもらい、完成しました。ここに感謝の意を表したいと思います。堅苦しい序となりましたが、では、うつな気持ちで以下をどうぞ。

——一番印象に残ったこととか、思い出なんかを、適当に、語り合つて下さい。

それ以来、もうさきり女の子が入いりなくなつたな。(笑)

そのころから、つきあい始めたな。男女大、県大の。いそ、じくの入いり前かうやつてたかな。

西川 山岸さんと樋口さんのころに、何かあったらしいのだな。

梶浦 県大のほうは、津坂さんを知つたんだ。で、それで、僕がつきあうようになったんだ。名女大のほうは、もっと前の、バスハイウからきているから、大分になるな。

西川 そうだ、両方ともに、あれだろう、バスハイウから脱退した仲だったんだろ。たしかそうだな。

梶浦 それで意気統合したのかしらんけど。だから、清純につきあってたのはあの頃で、その後、ますます陰険になつてきてさ、全然大のになつて来たな。(念をおしつて) 西川 そうか。(疑問の意あり)

梶浦 一番印象に残ったものと言われても、つとけ出ないけども、どうかあ。そう、あの旅行。(月ヶ瀬へ行つた時か) あれはおもしろかった。(西川) そうそう、それがういか、一番印象に残ったものは。それから徹夜で歩いたのは全部覚えてる。だけど、あの踏査会でののは、あまり覚えていないな。疲れただけだ。

西川 しかし、あの女の子はよく歩いたから。月ヶ瀬で、四年生が疲れたからいいだろうかって、来たんだけれど。だけどあの女の子、つたりとちやつてさ。しゃべる気もなかったな。

梶浦 それにさ、途中で、誰か話しかければいいのにさ。だれも言わねえのやな。四年生なんか全々話さへんのだな。あれはひどか。たよ。

西川 そうだな、あれは。梶浦 そんなもうあの日から来なくなつたな。だけど、もうあんなことやつたういかな。

そうだ、県大と会つたと言えは、あそこであつたんだ。け、柳生で。

梶浦 そうだ、あの時は、まる、さう知うんかったけど。

西川 あれは柳生へ行つて、梶浦 一年から二年になる時の春の合宿なんだね。大柳生で泊つて、それから、(西川) 仙田、城寺へ行く途中で、県大の女の子に会ったんだ。しかも、お互いに知うんで通り過ぎてさ。

西川 さん地図を持ち出し、その地点を探し始める。

とにかく全然知らなかったんだ。

西川 両方ともね。(西川) 西川さんを見ながら、梶浦 そうだ、大柳生で泊つたんだね。ここらへんで泊つて、その次、この道に入つたかな。そして左へ行つてさ。この道へ入、たんだ。

途やみさ、道が奥へ奥へ、

とにかく一日目は、予定通りにいったん、大柳生まで、それから、二日目に、月ヶ瀬に行く時に、めっちゃくちゃだったんだ。

あれは、いんちぎだよ。いんちぎと言いたい。いんちぎもいいとこでさ。とにかく道がわからへんのに、まあ、そう、ここからこの道を通ったんだ。

最短距離を走ろうということになって、ハッとして来てただけ、途中で、道がわからなくなっちゃって、それで、道なき道をかきわけて、

（いつものように、と声あり）ほんとうに、そうだった。山岸さんが地図を見とって、地形とくらべて、だけれど、走ったよ。

はい、はい、それ、それはね。ちうど、はい、合った。

浦、その日は、ラントを張って、飯を炊き始めて、食べたのは、八時ぐらいじゃなかったかな。それから、例の旅館のおやじが、いや、頭かな、酒もって来て。

地酒な。それで、飲もまいかって。一平野、そういうえば、その写真アルバムに張ってなかったの、一升ぐんといっしょに、あ、あ、あ。

寒かったぞ、あの日は。それで、月ヶ瀬小唄というのを、習ってさ、いっしょにけんめい唱ったぞ。忘れてしまったけど、あの時、自分たちが買った酒が一升、向うが、一升持って来て、それから、向うから来た人は、飲まんかったな。僕らに、おな、飲ませてくれたんだ。だけど、喉を通るうちは、寒くはないんだけど、その後の寒いこと、寒いこと。

梅が落ちとったし、あれはまだ四月の

西川 東へ出れば、必ず降りる。行けば、いんだからな。

梶浦 月ヶ瀬まで、えうかったな。峠なんかあって、一番だ、たよ。

西川 だけど、山岸さんがいて、氣勢をまきわけてくれたもんで、非常に助かった。

梶浦 そう言えば、変なことを、西川、誰々さんが、トッアゲル、いって、おりのものが、誰々さんです。あー、彼が急にトッアゲた、おどりでましたなんて。

梶浦 だけど、おれたちは、疲れてどうしようもなかったけど、彼らは速かったね。

西川 とにわか、あの日は、さびしかったね。梶浦 そうだ、一番じゃないか。月ヶ瀬までか。

西川 そうだ、一番だったよ。

梶浦 それ以来、あの距離を更新したことがないな。とにかく、朝から晩まで歩いたから。着いたのは夕方だった。

西川 夕方だったね。夕方も薄暗くな、了かたよ。

梶浦 今、もう、あそこは、水の底じゃないかな。

西川 それに、ちようどカムの工事してた。

梶浦 今、もう、あそこは、水の底じゃないかな。

かな。

た。途中で車に乗ったんだっけ。

それだ。とにかく時間がなかったし、疲れて、歩く気分もなかったよ。あの時は、夕いで車に乗ろうとした。

川だけじゃ、月ヶ瀬柳生というのは、かなりよかったですね。途中でリングをかじりながら歩いたりして。

あの時がうかな。リングをかじって歩くというのには。

(話題転換)

浦 僕が部長やっとな頃は、あんまり覚えていないな。鈴木君が、ぶったおれたことくらいしか。

保福寺跡か。

浦 あれは、よく覚えてるよ。あれは。あれもなかったな。

（ふんわりとした声で）のまさかんに唐井から。あれは、最初に無理したしんは。それに、予定だじ、あんまり歩くつもりじゃなかったし。

西川 実行委員長は、一キロぐらい、

んて言ってたんだ。

樋浦 たしかに「一キロ」ぐらいやな。直線距離にしたら。

（だれともなく）

× すぐ前に見えとるのよ。

× あれ見まがっかりしたよ。あれでいう峠が見えまらんじやないと思つて。かどをまがると、また元の方向にもどるんだ。

× すぐに上に道があったりして。

（思いだし笑い絶える）

格言「苦勞は笑う種」

樋浦 そうだ。徹夜歩行は、やっていないの。

高木 そうだ、あまりやっていないな。

平野 樋浦さんは、クワかなにかに、今度かどミカへ行かされたかな。

西川 そうだ。柴田君・鈴木君・平田君・加藤君の4人かな。だけ。

樋浦 あまり歩かなかった。

西川 そうだ、あまりね。それに早く着き退

寺本 そう。巨瀬君もいっただ。

樋浦 あのコースが一番よかった。

平野 あれは、大雲祭の前の日じゃなかった。

（それとも思い出さないの目）

西川 名女大の前だったんだ。そして星空を見ながら配ってたんだ。あーたの天気を。

樋浦 今は、あのコースを通れないね。あれだけ自動車が多く通つたり。トラックはんか、ものすごいスピードで、カーブ

だし、おどろいんだ。

西川 歩いてく景色のいいところだというのはわかったね。定光寺の裏手になるのか。

寺本 あの時、雨だったしで、朝もやむんかかか。紅葉が非常にきれいだった。

西川 しかし歌を、歌いながら歩いてたんだ。

だけ。ひかひか最後まで続かん。

樋浦 いつでもそうだ。最初の二小節くらいは、まだ。あつたか。あの日は、名女大

だったんだね。全然おぼろげに、よく行

（その時、三年生の西川氏が入室）

西川 それから、瀬やから多治見へゆけたコ

スもよかったね。

樋浦 あれは、寺本君といっただったんだ。

たんだ。

西川 最初に頼みに行つた時、どなられてしまったな。

梶浦 あればちがうて、あれは200円に値切つた所やて、

（大笑い）

山岸さんが行つたんやな。そいで、主人が出て来て「300円でのはどうですか？て、悪い200円にしてくれ。」って言つたら「出てけ。」と言われたんだ。

西川、びつくりしたな。あの日は雨で、テニスが張れず学校に頼んだんだ。だけど、最初は「いい」といったんだけど、校長が出てきて「だめだ」と言ふんだ。そいで困つてたら、土地の人が車にのせてくれてな、旅館のある所へ、つれていったるんで、車の後に乗って行つたんだ。

梶浦、今、あそこら辺は残っているかなあ。柳生には、旅館はあつただけど、主人が都合が悪く一休んでるちゆうことだった。

それからというものは、ものすごく足どりが軽くなつて、これは運がいいなと。

梶浦、だからおかしくなつたんだ。変な道へ歩いて行つたりさ。

梶浦 ああ頃は、研究とか何とか、堅苦しいことは、言わへんかつたな。

西川 言わへんかつたな。

梶浦 要するに、あの頃は歩いておればよかったんだ。そんで、ものすごく気楽やったんだけど、それ以後ためなんだな。何となく、かんとか言い出したもんで。

西川 それは、樋口さんの影響者だな。

梶浦 そうね、僕たちが一年の頃は、歩いておればよかつて、あまり研究なんてしなかつたな。

梶浦 歩けばよかつたんだ。結局、ワングルと同じスタイルだね、ワングルの奴は、山へ行くんやけど、僕たちは、丘を歩いとつたんだ。で、多少目的があつたことはあつ

大柳生へ行つたんだが、あす二は一軒しかないんだ。学校から一キロぐらいの所かな。西川 もこの話にもどるかもしれないけれど、もうすこし行つて、果大の人達と合つたんだな。

梶浦 僕は知らなかつたんだ。僕と鈴木は、先に歩いて行つたんだ。知らんと通り過ぎて、山岸さんと君たちの所で気がついたんだな。

西川 そいでもどつてこいと言つたんだ。

梶浦 最初なんのことがなと思つたら、果大の女の子なんだて、びつくりしたな。

梶浦 びつくり、とにかく連絡なしで行つたもんで。

西川 一番最初、あいさつして通り過ぎたんだ。そいでまあ、あとから幾人か来るじやないか、そいでよく見たら、前年ゴンバやつた時に見た顔なんだ。こちらにはよく知らなかつただけど、山岸さんがよく知つているからさ。それから、記念写真とつて

たにしる、要するに、くそくらえ勉強なんて、歩いとるだけ。

西川 たしか僕たちが、一年の後半から研究か、名古屋城の取り組みを始めたんだ。

梶浦 そう、あれは要するに、樋口さんが、言つたんだね、やるつて。それで、我々一

年生が、がたがたにやめて行つてしまつてさ、二人しか残らなかつた。

西川 その前にさ、あまりなにもやらなかつたさう、歩いとるだけでさ。その時もさ、やめたんだな。そのあとで、研究や

言つて、ちやうど順調にのつて、この春の柳生会宿へ行つて、その後で、みんな、やめていつてしまつたな。

梶浦 だから歩いとればいいと言ふことにならんやけどな。だけど、それは考えたとえは、ぼくはクラブに對して、それほど愛着心なんてなかつたんだ。そいで、クラブがどう変わるうと、よかつたんだ。だから、会宿へ行くと云うなら、ついて行つたし、

研究すると言ったら、まあ、与えられたものだけはやった。それを、やらないかなんて責任感なんか感じちゃうと、もうおもしろくなるよ。だから、やめて行く人が多かったし、その点、今の3年生、2年生の連中はやめなかったな。始めからそうやと、思っているからかな。やめなかったのが、不思議でしょうがない。

西川 そうだな、僕も入っている時そうだったかも知れない。

西川 はつきり言うよね、今の2年生がね、入っている時に、一人でもやめさせないように出来るだけ暖くしてやろうとして、まあ、言うこともなるべく聞いてやったし、(へ笑)まあ、してやったと言っのかなし。しかし、まとまってるね、今の2年生では、川 しかし、ちよつとうらやましいな、僕たちの時は、2人しかいなかったし。友達を知る前に、みんななくなっちゃったる。浦 出てこなかったんだな、わざわざ。

に、ざつくばらんではないような気がするんやけどね。表面上はざつくばらんだと思っけども。

川、そうだな、昔話になるけども、昔は、こっぴから安んえたね。だけど、今はどうもあんまり笑わないな。

西川 たしかに、今は、縦のつながりがないでしょ。2年生は2年生同、でよく話し合っけれども、二三年とか、一三年とか、昔と比べて、弱いような気がするね。又、そのようなムードもないような気がする。話ずらいんだな。僕は2年生と話し合おうとするんだけど、何か、それを受けつけないような雰囲気があるんだね。

浦 だけど、僕たちの時も、一年の時なんだけど、四年なんかとは、話にくかったと、覚えてるけどね。

川 まあ、四年生なんか、ほんと、別人のやうな気がしてさ、あんまりしゃべらな

西川 あの時、樫浦と二人しか残らせんかった。

樫浦 知らんどううちに、いなくなってしまうんだ。

西川 どういうわけか知らないけれど。

樫浦 今のクラブに、別に言うことはないけど、唯、今ちよつといやだなと思うのは、案外、その、ざつくばらんやうやけどもね、本当に、ざつくばらんかと言っかね、どうも、ひっかかりがあるな。たとえば、旅行へ行くにしても、いちいち予定をきかな行けないような状態でしょ。だから、二三人が、二三日前にちよつと集って、そのまま出かけて行くとかね。あいつに知らせてやれとかいって、それで旅行へ行くから聞いて、当日顔を出さやつがね、まあ、そのぐらいの旅行があつてもいいじゃないかと思っね。どうでしょう。か。そういう面を考えると、やっぱり、本当

が多かつたし、その人をあまり理解できなかったな。たとえば、四年生の松山さんを見てみさ、あの人、名古屋から東京まで歩いて行つたしな。テント持ってね。それだけ気骨のある人だし。

樫浦 何んか、一癖あるような男。

西川 とにかく創設者はえらかった。

樫浦 そうだ、春急病で座禅をくまされたのあれ覚えとるけどさ、

西川 関ヶ原が、一昨年の春だね。

樫浦 あの時はえらかった。時計の音が、カチカチと、あれだけ覚えとる。

寺本 あれて、十分もやっていなかったじやない?

樫浦 そうだ、だけど三分以上は感もたな。

西川 ガウンしてしまったなあ、痛くてさ、早く終らんかな、馬鹿野郎なんて思つてさ。

(今の馬鹿野郎取消し)と西川さん言う

坊さん出て来て、太鼓とお経でせめてら

水たんだ。それに、夜は夜で、お水たち

やってくるしき。太鼓が隣りにあったな。

四、とうで、あの時、山に登ったことがあ

ったでしょう。それで隣る時にさ、ガケツ

ブチに出てさ、

隣、あれは、だれがお、たどこや、た？

四、宇喜多の陣営かな。

隣、とにかく登りはよかったんだすれども

隣りもれんのだ。だけどまあ、あそこを隣

りたからな。だけど、よくも隣れなと思っ

たな。

四、野水場のあったところでしょ。

隣、あ、写真を写したところでしょ。

四、だけど写真はためだよ、迫力なくて。

あすこ、下を見たら、吸い込めるようだな。

隣、直月ぐらいかな。

四、あれは、僕が行、たどこ？

隣、高木つれて、たな。

四、あれは確かダムみたいなのとこじゃなか

うな。

四、六時ごろやめたんだ。それで三十分か

四十分ぐらい休んで、又、

隣、ようおきさんだな、

隣、山崎さんが居、たで、あの人がすごく

やったんだ。ぼくもそうだけれども。電車

の中でも、ムチャクチャやっとな。あ

れ以来やってないな、ちよっとやりすぎた

ちよっう感じやな。

四、最近はずマージャンじゃないの、

隣、だけれどあれは持って行かないな。トラ

ンブだったら、何やっとながゆからんけども

マージャンや、とると、マージャンで介る

った？

隣、そうそうあすこ。だけれど、僕は割ヶ原

へ何回か行、たな。おせぬにな、ていま

す。(高木氏の方に伺って)

四、僕も、大分いっとりま。

(なにせ割ヶ原の原住民だからな)

隣、だけれど、あんまり普通の日にやっ、た合

宿というの、あんまり覚えていない。

や、ぱりおもしろくないのかな。

四、からだが動いてないからな。

隣、そうだ、疲れてないな。

四、ランプもつかや、てな。

四、よくや、たな、一番や、たのは、何、

長野へ行、た時か。

四、そうそう、あの時は毎日や、つた。

隣、毎日や、つたな、徹夜で、あの時だ

な、あれ以来やめたな。

四、あの時は責任を感じました。

隣、やりおさめかな。信州大学でかな。

四、あれは完全に徹夜だったな。途中でやめた

四、あそここの鉄橋渡る時に、

隣、そうだ、写真があったな。

四、津坂さんの決死的な撮影とかわつてい

のか。鉄橋で見つかると罰金なんだな。た

けれど、他に橋がなくて、しかたがなくて、

案内人の人が、橋を渡って行きなさいと言

うもんで行、たんだけれど、帰りはどうし

うかまって迷、てたんだ。えい疲、てしま

え、てんで、渡、たんだ。そして、又本

の所へもど、てきたんだ。「バア！安心と思

ったら、三十秒かどのくらいだ、な。」

通、て行くんだな列車が、「バア、なんて

三十秒もた、ていなか、たな。井村君がし

ールに耳を当ててさ、来てないなんて言

から、それを信頼して、橋を通、たらす

来るんだな。あの時は「ドキッ」としたな。

四、線路がぐにゃとへんな風にまが、て

な。

四、しかし、名大祭では苦労しただけや

な。

寺本 しかも、くさい穴のあいたので、なん
とかしますって言ったんだけど、何ともし
いせん。僕は、てっきり頼んでくれるんじ
やないかと思っただんだね。あいで一の田
根浦 だけど、全国一律なんだぜ、一の田
かな、いぐ一五の田かな。シラフもって行
くと五の田ぐらいなんだ。

旅行というのはいいけれども、どんだけ
でも金もうね。だから、やり方によって
いろいろある。さういふことがあった
りするんだ。だけど旅行するのは、バプニ
ングがある。おもしろいんだ。何が起るか
分らん。

西川 最近ないな。

水野 最近で移動すると、向うが近よりがた
いんや。さういって来る。さういって
も、な。

水野 ハプニング、フーガ?

根浦 (一本音が聞かずにされた)
今でも、歩いていても、そんなこと

根浦 としてもいいな。もう忘れとる頃か
もしれないな。だいたい、大学出て、五年
目くらいまでは、何でも忘れとるんだって
。今は、何でも忘れとる頃やな。

西川 山岸さんもしばしばとる頃やし。今頃
あの人、カウスターの所に立。とるぞ。

水野 工頭さん、そりやあやあや
西川 色々流行語があったわ。金儲ことになさ
根浦 流行語って、たくさんあったな。

西川 たとえば、山岸さんが流行語作ると、
根浦 それが、一月ぐらい続くもんな。

(最後に)

根浦 これからは、西川と僕は、大学に居る
けども、四年生ではないんだね。だから、
なにか、電話をしてくれないかな。僕なん
か、学校に居る方が長いんで、ほんとうに
。だから、学校へ電話をかけてくれないか
な。そうしないと忘れちゃう気がするんだ。

はなかつたね。クラブで行った時は、全然
出てこなかったな。

西川 おかしいな。

根浦 友達と行くを言うんだ。

平野 僕たちが、あまり観光地へ行かないか
うかな。

根浦 かわった所は、かりへ行くもんで、た
しかに観光地なんで行かないね。よっぽど
でない、観光地へ行く。でも、はずれを通
るもんで、だからおもしろいんだ。でも
、クラブはいてさ。

寺本 O.B.会作ろうってのは、

根浦 O.B.会か、そろそろ作ってもいいね。
だけど、場所体やな。毎年寄付出さんなら
んな。たけといいいね、だいたい人数もふえた
し。

寺本 一人ぐらいいかな。

根浦 連絡つけてもいいな。だけど、忘れと
るかな。

西川 クラブとては、何人にも、

要するに、行きにくくなるんだ。コンパぐ
らいなら行くし、踏査会へも、旅行へも、
でさればな。

(一日念ハイヤると、Bの声あり)
ちやうとでられんやな。

(あと笑い)

じゃ、今からコンパへノ、

(二月二八日)

作品編

Ⅱ卒業生Ⅱ

「たき火」

梶浦博一

枯木を集める。木の根っ子でもいいし、小さな枯枝でもいい。できればススキなどの枯草がほしい。大きな太いものはナタで三十cm程の長さにする。細いものは適当に手で折る。枯木は表面が湿っているだけで、水の中に浸っていたのではない限り、内部は十分に乾燥している。次に新聞紙又は雑誌をできるだけ多く敷いて、その上に円めた紙と、乾燥した枯草、小枝を置く。そして、太い大きな木をその囲りと、その上に組み立てる。イゲタに組んでもよいし、ピラミッドにしてもよい。大きなものにするには、イゲタの方がよい。そして火をつける。始めは紙、次に枝に燃え移る。太い木からは白い蒸気がさかんに出る。パチパチという音を立てながら木は燃え始める。そして、

をこう考えたのである。

人間が、いや人類に近い動物が火を使い始めてからどれ程時間が過ぎ去ったであろう。二十万年、百万年、それ以上かもしれない。しかし世の東西を問わず火を枯木によつて得てきたのも又真実である。が、極く一部には燃える水、燃える石を使った事が記録に残っている事も事実である。それはまだ使える品物でなかったし、多くの人々には無縁のものであった。木が、植物がどのようなにして火として放出されるエネルギーを蓄えるか、現在の人ならば誰しも知っている。火や炎が、かつての四元素説に出てくる根本的な元素でないこともよく知っている。しかし古代人、中世人には一つの元素であり又神であつたりしたのである。人は火を種々の用途に使用する。現在でもなお、しかし大昔より使用された形は、たき火ではなかったか。「たき火」は照明であり、外敵から身を守るものであり、調

あの特有の木の香り(臭い)というよりは、を放ちながら。この香りは、燃やす木の種によつて様々な変化を持ち、楽しさがある。白い、青い煙の中から小さな、明るい煙が顔を出す。その囲りには、腰掛用の石が置いてある。火の向う側の顔がゆらいでいて、薄くなった囲りをほんの少し照しながら、やがて青紫色の煙が出る頃になると、々とあたりを照らし出し、透けるような紫色の煙は、満天の星空の中へ昇ってゆく。遠くには中央アルプスの山脈が、すぐくには明日攻撃するであろう駒ヶ岳、黒い影を見せている。手許にあるラジオリン、いたる所の電波を手当り次第に取つてくすでに二千mのこの高地では星に手がきそうである。遠くの山脈の向う側には雲があるのだろうか、時折、山脈の尾根サーチライトを受けたようにくっきりと見える。赤々と燃えているこのキャンファイアを見つめながら、炎と人との対

理するものであり、暖を取るものであつ

天山山脈の中で、サハラ砂漠でも、里付近の大草原でも、羊の群れを追い、牛追つた遊牧の民も、大海原に魚を追いかつた海の狩人もその白い砂原で大きな炎を燃だてたであろう。何千年も、何十千年もその対話を人々は続けて来たのである。一世紀の今日、人々は自然との対話の中で、火の正体、その真理に近づく事に成功している。酸素と炭素を発見し、化学エネルギーを解放し、量子理論を武器として、光と熱との関係を明らかにした。その第三の火、原子の火を解放することによって功した。今までの光と炎は電気と原子と、とてかわられようとしている。又枯木、石油、石炭にその舞台を譲っている。一世紀を迎えようとしている今日、我々が登る時、ガリリンやワックスを持行く。そしてそれによつてほとんどす

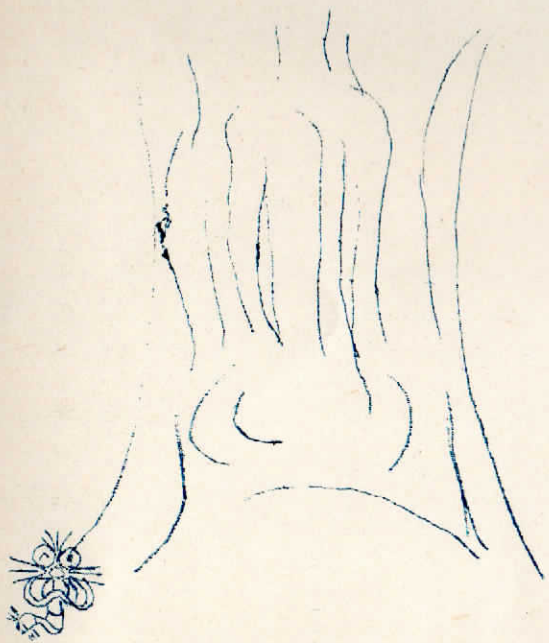
の事は間に合うのである。しかしそれでも我々は重いナタを振って枯木集めに汗を流す。それでもたき火を囲むのである。

たき火は日本では「イロリ」となり、西欧では「ペチカ」となった。これ等はたき火の持つていた役割をそのまま果しているが、その内暖をとることとそう一つのこと以外はずでにその主役を他のものに譲っている。火がどのようなものであるかは少なくとも高貴貴族の理着の衣を脱ぐば明らかであろう。しかし、そのような科学的証明には無関係に我々はたき火を囲むのである。人々が求めるこのもう一つの事は、たとえ「たき火」という習慣が無くなっても人々はこれを求めるだろう。その人類に共通なものとして、民族を超え、地域、社会、習慣、風俗、言葉が異なっているも、客を自介達の「たき火」に誘うことはすべて同じである。客はすでに客でなくなるので火を囲む時、客はすでに客でなくなるので

見えるように、又誰にでも近づける事のできるものであるようにしたい。そして自分も又大きくなった火の中の人々との対話を持ちたいと思っている。

そんな事を考えながら送けるような煙の行方を見ていた。そして相当苦しいであろう宝剣への挑戦を思いうかべながら。

一月六日 記す



ある。このもう一つの事に対する適当な日本語がないように思う。強いて用いければ郷愁かもしれないが、あまり良くない。我々は心の中にたき火をもっている。又特とうとする。特に現在の社会において、人々は孤立しているし、閉鎖的である。しかし一方人々は共通なものを持つ集まる。おの事を希望するし、安心を求める。僕が四年間の学生生活でクラブに属していたのは、そこにあるかもしれない。クラブはある特定の目的の他に例えは勝負に勝つ事、研究の成果を得る事、クラブというたき火の中に、たき火の回りに居たい気持ちで満足させるものがあるのではない。多くの大学集で「ファイアストーム」が何故行われるのであろうか。

僕は四年間でこの「たき火」といつでも囲めるような友を得ることができたし、自分の中に、心の中にたき火を燃やすことができたと思う。このたき火と遠くの人々に

「金といえなければ交換するものといえなければ、抵当も担保もいらないのである。なぜなら、すべての物事が豊富にある、しかも誰が必要以上に貧乏心配のない所では、欲しいものを欲しいだけ欲しい。この不都合はないからである。けれども、この不自由することのないという安心感、この安心感がある時に誰が必要以上に貧乏者がある。今さら言うまでもないが、あらゆる種類の動物が餓鬼のように貧乏になるのは、実に不足に対する心配であり、特に人間においては虚栄心である。人間はなくてもいい、玩具のような物を見せびらかして他人をしのび、それがすばらしい光栄であるかのように思うものなのである。そういう悪徳を知らない国民、それがすばわちユートピア人なのだ。」

新しい季節……盗作集より……

——ひとよ、

あなたの未来にささげる——

池田 全

新しい季節ははじまる
白い闇とともに

野に降り強く足をのばせよ！

蒼空に柔らかく手をさしのべよ！

長い秋の後に来た

この凍つく感情

このきびしい光

この刺す風

この新しい季節の贈りものを

精悍にからだ一ぱいに受け止めよ！

そしてこの白く烟った野の間に

心を獣のようにさらけ出せ！

白銀をすべる狼のように

この散光の中に生の色を捜せ！

やわらかい秋の日に

青い今日の光に

けがれを知らぬそのからだを

冷たい闇のなかにうずめよ！

昨日の色を決して思い出すな！

過ぎ去った夢の泡として

失い果てた人々のために

新しい季節ははじまった

白い闇とともに

「ハイネとマルクス」

平野 善敏

ハールブルクから

ハールブルクから一時間

ハングブルクまで馬車にゆられた

もう夕方だった

空の星はぼくをむかえて輝き、

白い闇へと

そして闇にとられ身をささげよ

この季節のために

新しい季節ははじまる

白い闇とともに

冬は何と白いのであろう

世界は何と早くめぐるのであろう

不安なき赤き日は去った

頭から四つの壁は取り去られた

今は静かな輪にあるが

今日は枯草に立って

そろがれる 熱湯の

冷たさよ！

新しい季節ははじまる

白い闇とともに

時は再び帰らない

空気はなごやかでさめやかだった

そしてぼくが母のところへ着くと

母は嬉しさに声も出ないほどだった

「まあおまえ」と叫んで

母は両手を打ち合わせた

「ねえおまえあれからもう

十三年にもなるんだねえ

きつとお腹がペコペコだろう

さあなにが食べたい

うちにはお魚と鶯鳥の肉と

おいしいオレンジがあるよ」

「それじゃ魚と鶯鳥の肉と

おいしいオレンジをください」

ぼくがバクついていると

母はうれしそうに顔をかがやかした

母はあれこれいふことを尋ねた

時には油断のならぬ質問をまじえて

「ねえおまえ外国にいても

きちんと身のまわりを

みまもらっているかい

靴下やシャツをつくろってくれるかい」

「この魚はおいしい お母さん

だけども、て食べさせてください

泳ぐのになつかかりそうですから

いまゆっくり食べさせてください」

そしてそのおいしい魚を食べてしまうと

鷺鷥がはこばれた

母はまたあれこれと

いるんことを尋ねた

ときには油断のならぬ質問もまじえて

「ねえおまえどっちの国が

ほんとうに住みいいかい

いまでもあいかわらず

政治がおもしろくておやりかい

おまえは主義で

どの党に属しているの」

「このオレンジはお母さん

うまいです汁が甘くて

なんておいしいんでしょう

皮はここに置いておきますよ」

—— ハイネ詩集より ——

八四三四年ハイネはパリに来往した

マルクスと知り合う。マルクスもハイ

と同様に、ドイツの虚偽や野蛮な権力と

争して自由なフランスへやって来たので

った。偉大な革命家とすぐれた詩人は、

間として結びついた。マルクスは詩人ハ

ネのなかに新しい社会のための闘争の同

を見いだした。ハイネもまたマルクスの

ドイツかい フランスかい
どっちの国民がえらいと思う」

「お母さんドイツの鷺鷥はうまいです

けれど鷺鷥に詰めるのは

フランスの方がじょうずです

それにあっちはもっと

いいソーヌがありますよ」

そして鷺鷥が食卓から退散すると

こんどはオレンジが伺候した

これはいつにうまかった

ま、たく予想以上だった

また母はとってもうきうきして

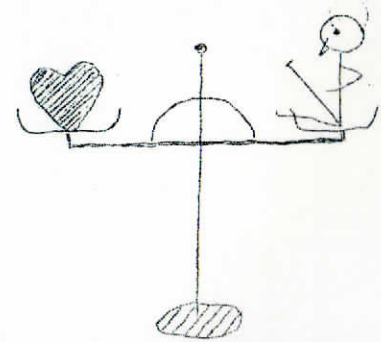
聞きはじめた

さまざまのことを

胸にこたえるようなことまでも

「ねえおまえいまはどう思っているの

した。昔ながらの鳥き世のなぐさめの歌や
人民を眠り込ませる子守歌に反対して、地
上の人々を幸福にできる新しい歌を確証し
たのであった。とくに母に対する愛情は、
旧時代のへだたり、詩人と政治のかかわり
合いなどは前に引用した叙事詩「ハール
ルクから」にみごとに写されている。



これは何だろう？地震かな？
脳波だよ！君が授業中にうつらいつた

あるノンポリの

つぶやき

百瀬敏雄

もう大衆への幻想からいいかげん醒める
といい。そもそも全共斗運動とは一体何だ
ったのか。今までの斗争と何が違っていた
のか。死んだ言葉は拒否した斗争であった
のだ。偽善を廃した斗いであったのだ。い
なおりを拒絶した斗いであつたのだ。沖縄
が我々のヘゲモニーで返還されます。だが
ら沖縄返還を叫びましょう。安保は、ここ
とここがこういう風に悪いのです。だから
昨年に廃棄するよう運動をおこしました。う
そうい。た。い。わ。ば。大。情。況。よ。り。の。自。分。の。規。定。
では決してなかったはずだ。まさに死んだ
言葉では話せない。口から出たら最後、決
して自分の考えではなく、他人の間であらう
いかけ、つきつめれば不条理にこそ、その

根を持つてゐるかもしれないものの不
問いかけであつたはずだ。決して教育の
国主義的再編とか、国大協自主規制路線
かいう冷たい魂のない運動ではな
か。た。の。だ。各。人。一。人。一。人。が。自。分。が。今。生
きてゐることは一体どういつこののか
何の為に、又如何に生きることができ
るのか。という問いかけの観念上の答と、現実の状
況のくい違ひの段層の亀裂の深さにおそ
おののいたもののみが、あるときは、四三
声。明。見。解。白。紙。撤。回。斗。争。で。あ。つ。た。で。あ。う。う。
又ある時には佐藤訪米阻止、沖縄奪還で
つたであらうスローガンの内実を満たし
斗いであつただろう。また放置され差別
犠牲を強いられた、それでもなお佐藤訪
阻止と叫ばねばならなかつた沖縄県民、米
兵の銃をつきつけられたソニン村の老婦
自分への置きかえの斗争であつたはずであ
る。又生命の危険を賭し、家坑でツルハ
をふるう人間がその日の飯に困り、ブル

ジョーが彼等を虫けらと呼びなぜ何億の
金を集めふんどりかえるのかという根底的
な素朴な怒りのつき上げの斗争だ。たはず
である。それがあつて一つの便宜的改良策
として社会主義があり共産主義があるのだ。
だからこそ我々の斗いは、希望なき秩序への
総反乱とならねばならなかつた。決して政
治を文学で語るというのではない。この場合
文学とはイコール人間なのだ。人間があつ
て政治があるのだ。自分の債権を上げろと
叫んでよいのだ。カリキュラムを改善しろ
と要求してもよいのだ。だが、その訴えが
ら自分が人間でありたいと叫ぶ運動であつ
たか。てふくらだたきにするのができ
るのか。展望がないし合理主義につかう
とするのが何故できるのか。展望とは一
体何なのだ。展望とはいかに不条理を止揚
するかを切り棄てた。一日近はしの逃避で
はないのか。人類への貢献、この言葉の
本来の意味、今君自身が口から出す時の

気取かしこ、偽善性をいったいどう思
だ。我々の大学生としての一つの不条理
止揚は今、君がそして僕がヤマン的に述
た学問研究の人類への貢献ではないのか。
いくら大学の自治、学問の自由を唱えろと
身てもそれをヤマン性を解消する道具に
えないはずだ。まさにそのヤマン性口は
たさを心底からぶち壊す運動なのだ。た
からこそ死んだ言葉でも、人間である
とする運動を圧殺する、現体制そして大
当局民衆の存在が許しがたいし、勝ち目
ない暴力操置へとヘルメットでつ。こむ
だ。
全共斗運動はその人間のうめき、不条
を共通基盤を媒介した運動である。だが
ら運動にながら孤獨であるのだ。決し
てある党派の如く、その党派以外理論の個
人のうめきを切りすてて全部をあたかも
せかけ全部と要求するものではないのだ。
言葉にならないうめき決して又ルックス

ンでは語れない。めきその各人明瞭に表
れない。いわば電子雲すべても包摂するの
又それだからこそ全共斗運動なのだ。だ
う立てこもり撤収抗戦をする。日知見的人
も存在すれば、バイトに精だしバリから
のく日知らない人間も存在するのだ。全
共斗内のセクトはそのめきの一部が
それを媒介して表出する、沖縄、安保派
指導するものであるが故に、それを忘れ
派を自己目的化するれば、あっさりと捨て
れる。それ故ノンセクトが主流を占め
るのである。決して飯に我々が論議死んだ
案で粉砕されたとしても自己批判しないし
さな。計事を組んでいるのである。
要求圧力団体ではなくめきを感じ、そ
に固執し苦しみ回避しない人間のみと
少数であろうとも連帯できろ。斗争であ
る運動への責任はその固執の持続にのみ
ある。その体制変革の指向は太ではあ
がすべてでは決してないのだ。

人食うの軽べつしていた蛙まであんまり
かんようになりおった。
それにお百姓はんらみんな車もっててび
んびんとぼしよるし、また道を埋めて
塀をつくらんやそうで、ダンブがようけ
りおる。うちのおとうちゃんも車にひッ
れてあ、さうありせうさや。そんなわけ
で、昔はようけおったわての仲間もあじや
とプー子と、よいよいで寝たさりのプ
ー子おじいちゃん三匹だけになってし
た。このプー子もゆうのがほんまに可愛
う。タチズンわん、毛の色つやはいいし、
はさゆつとひきしま。てて、じっぽをびん
あてて、お尻ふりふり歩きよう。わ
てうしても嫁はんにしとて、プー子は
いざらしい気持ちでいうとろんとちが
ます。イタチ一族の子孫繁栄のためわて
結婚しとくなはず。いうたらあいつ、わ
んさんみたいに無細工でいなくタチさ

イタチのたわごと

平田雅司

あーあ、そろそろこの土地から引越さな
あかへんなあ。しんどいこっちゃ。ここは
景色もええし、えものもぎょうさんあって
ええところやったのになあ。なんでも昔、こ
こは海を埋めたてて田や畑をつくったんや
それで、それを伝え聞いたわてのひいひい
おじいちゃんの子供のころ、その頃
は伊勢の松坂におったんやそうですが、こ
ちらに引越すというお百姓はんらの荷物に
ぐくわてや、て来たんやそうです。その頃
は、お百姓はんらが汗水流して田を広げて
ゆくにつれて野ねずみもふえてゆき、わて
らの大好物の鴨やどじょうもようけおって
食うには困らんが、たんやけじ、それが
この頃では農薬の影響らしくて、えもの
がとんどん減ってゆき、へしもねずみもあ
んまりおらんようになって、わてらあん

「井の中の思索」

伊吹悠行

新治は地下鉄に乗っていた。彼を乗せた
黄色い鉄の箱は轟音を響かせて、闇の中を
突っ走っている。昼間は、箱がパンクして
まうのではないかと心配する程の人々を
乗せ、トビウもはずれるほどの状態で走
ている地下鉄も、夜の十一時を過ぎるとな
ると、一車両に二、三人しか乗っていない
昼間なら、高校生の話し声や、若い女の笑
い声などによって、機関の響きも、顔を赤
らめろほどの騒々しさであるが、その高校
生たちも家で、あるものは机に向い、ある

めてやすらかな寝返を立て、そうして若い女達は、昼間の笑いも忘れ、その目には涙さえも浮かべて、娘らしいロマンチックな夢に耽っているであらう今は、機関の音だけが、昼と一向に変化のない調子で響いているだけである。他の音といえは、時々カブを曲がる時なんぞに、連結が「キコリ、キコリ」と音をたてるだけである。そして動いているものと言えは、とまりきの無いソリ、皮が左右に物憂い様に動いているだけだ。もちろん車両も動いているのだが、地球と同じでその内部にいるものにとつては一向に動いていようには思えない。そしてこの一種の死んだ様な世界の中では、二人の乗客も生命ある人間とは思えず、車両の一部であるかの如くに見える。すなはち、その身体の中をあの血潮が駆け巡っているとは思えないのである。そのまばたきさえもしない目は、はたして車両の一部をなす取っているかどうかは疑わしい。それ

してその身体は車両と同じ鋼鉄で出来、の頭の髪は座席の緑色したじロッドから来ているとさえ思われる。そして、たまに車内に車両が停車しても、一向に車内に変化が起らない。強いて言うならば、トラが一日の仕事に疲れたかの如くに、大なるあくびをするだけである。

新治は、その二三人の中の一人として、大きなカバンを大事そうにヒザの上に乗て、熱い血潮の流れを留め、因体を車両鋼鉄と同化させて、連結部近くの、ちやうど三人ほどが座れる程のスペースのあつた席の一番奥まった所に座っていた。彼は、キブリ精神というが、常に角を好んだのである。……だから、他のものより、一層車両の一部の様に見えた。彼は本山という所より近くにある名古屋大学という、この地方では割合に名の知られた大学の二年生である。その日新治は、四時ごろ授業が終わり、二時間ほど図書館へ、彼が字部へ行った

ら彼の専門として学ぶであらう電気関係のことと調べに行つたのであるが、六時ごろ図書館が閉り外へ出てみると、もうじき夏休みさむかえる七月だけあつてまた暑かつた。彼は直ぐ家には帰らず、図書館の東洋館にあり、二三本の植込みがあつて下には柔らかな芝になつて、いる所、横になつた。

(以下、次号 御期待)

冬ミ 69

大場吉嘉門

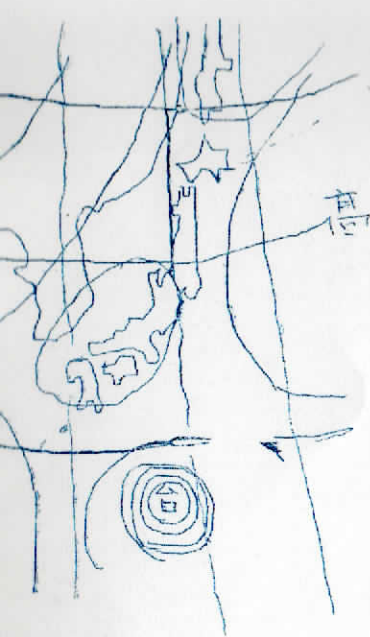
冬枯れの街中をひとり歩く。シヨウウインドウはクリスマススの飾りつけでにぎやか。人は、北風に裸をたて、せわしそくに歩きかう。一九六九年、七の年前夜が暮れようとしている。デパートはどこも、今年大盛り出しの、のたれ幕をかかげ、年々始の買い物を、その肥えた腹の中へ

がつがつと飲み込んでいふ。あわただしさの中にある寂しさ、冬の孤独感、そんなものを感ぜろ。広場の噴水は、いかにも無気力だ。……12月27日は衆議院選挙の投票日です。の横幕をつけた宣伝カーが走つて行く。靴みがきのおじさんは、またいつもの所でせつせと手を動かしている。……正月は、かあちゃんのおいしさを、子供連れて行くんや。……グレーの紳士は、黙って、靴みがきの手を見つめている。街燈に貼られたビラが、冷たく北風に鳴っている。

一九六九年夏、人間が月へ行つた。ベトナム人民数十万の死とは何ぞや。日本のマスコミは、「昭和元禄」を乱用した。……性の氾濫。漫画の洪水。ほとんど週刊誌は、この二つを満載させた。それは、七の年前夜夜を象徴するに最もふさわしいものの一つではなかったらうか。……性の氾濫。それは、古い偽善的な性道徳への反抗を意味していた。あまりにも根強く

残っている封建的な人間関係と性觀念への
 反逆であった。そして、古い人間像に對す
 る告発でもあった。今、性の氾濫は、
 腐敗現象、古いものが崩壊してゆく過程で
 の一が大きな割合を占めている。私たちは
 その中から、人間の自然の欲求のみずみ
 ずしい開花にむけて、新しい芽ばえを見つ
 け出し、新しい人間觀の形成に向かつて進
 まなければならぬ。

若いカッパルとすれちがう。女の長い
 黒髪が印象的だ。レコード店の前を通る。
 「ホワイトクリスマス」が流れてくる。現
 代日本のクリスマスは、クリスマス・イブ
 のためにあるようだ。クリスマスツリーと
 ブーキとジングルベルがあるからクリスマ
 ス。今月21日は衆議院選挙の投票日です
 の宣伝カーがまた通る。投票率の低下を
 はやくも感じとっているかのように、あわ
 だしく、地下にもぐる。地上より明る
 くて暖かい。それだけに、季節感はい



後の方向は如何

さって走って行く。スキーを載せたマイカ
 ーが、北に向かつて走って行く。あと少し
 で七の年。「変動」の年。何か起ころう。
 村長のSさんが、A町へ行ってきた。そ
 のおみじけを、自慢しながら一軒一軒村中
 の人たちに配っている。次の村長の選挙の
 票集めをしてるんだ。ずるい。そのおみや
 げの中には、毒が入ってるかもしれない
 だ。ぞくぞくする。六九年は暮れる。
 七の年がやがて来る。今後の日本の進路を
 決める分岐点だ。と人は言う。古い殻と、
 偽善的儀式からの脱却——日本は今、むず
 むずと動きはじめている。

れる。ただショーウィンドウのかざりつけ
 だけが、季節のあらましを告げてくれてい
 る。「慈善なべ」のおばさんたちがいる。
 「サイマツタスケアイウンドウニゴキヨウ
 リヨクヲオネガイシマス」。ガラスケース
 の中に、きれいに着飾ったアイスクリーム
 ケーキが並んでいる。この店も「ジン
 ルベル」。「ホワイトクリスマス」でなく
 リン・イヤックミニスカートとパンタロン
 の洪水。均一化された長いまっすぐな
 アースタイル。「流行」を追え、暖かい地
 下から、再び地上の騒音と北風の中へ。寒
 いけれど、この寒さが何となくいい。夜の
 ホームで電車を待っている時、冷たい北風
 がなんともなく快く感じられることがある。
 あの感覚だ。「精神の張り」なんてものじ
 ゃないと思う。おそらく、後に「暖かい都
 屋が待っている」という確約、確信があ
 るからだと思う。信が黄色になる。おか
 人箱をいっばい續んだトラソクが、北風を

「みんな夢の中で」

川氏からの手紙

伊吹悠行

去年も同じ様な事を書いたと思うが、こ
 こ数年筆無精のせいかな、年賀状も書いたこ
 とがない。そんな分で、いつも返事が遅く
 なってしまっただけで、いっつも返事が遅く
 振り返ってみれば、一年なんていうものは
 たあいも無く過ぎてしまうものです。さす
 れば、それが六十回ほど集まった一生も
 言わずもがなです。年の始めにこんな情け
 無いことを書くのは、縁起でもないことだ
 すが、目出たさの中位になり、おらが春
 であり、昨日とそれほど変わった事もな
 い元旦であり、別に新たまって、ザルゾ
 ーと思う事もないと思われす。小生、今年
 が如何なるものになるか皆目見当もつきま
 せん。で、一年の計も立て倒れとなるかも知
 りません。でも来年の正月にまた同じ様に

以上のことかできればと思つています。
以上の様な個人的な今年に対する見逃し
とは別に、ある大きな流れの中に身を置か
ねばならないことも確かでしょう。70年が
70年代の、云々」と多分アイロニーで書くとニ
ンと聞えますが、なにか安物の人生論で
ないか、旅の恥はかき捨て同様、若い時
代もぐき捨てだと思えますから、そんな
ことをいふことを言っていないで、恥で
済むもかへきだと思えます。でももっ
も、こんなことを言つて、ザルゾーと動
して、せいぜい、マスターベーション
をする位いが落かも知れません。それ
から小生はまだまだ二十才の子供だと思
えます。でもどうせ、同じ穴のムジナ大人
なるなら、そうあわてたことも無いと思
えます。でも昨年の総選挙の決果や何やか
から予想して見るに、ハプニングミニ
カルヘアーと同じで、フタをあければ、
なりかねません。それに六月頃は万博へ

万博へと草木もなびいてゐることでしょう。
正司薫ちゃんへ失礼かな、でも本人がそう
言っているからいいでしょう。ではないが、
ダンボダンボをねりやねという決果で幕
かも知れません。それだけに、逆の意味で
六十年と同じ様に、また沈黙の季節が来る
とは思われないし、一種の慢性化した闘争と
なり、したがって、闘士が十年後には、二
ヒルなブルジョワであつたなんて決果には
ならないでしょう。そして下ろし無事
決の期会にして。
それはともあれ、文面から察するに非常に
精力的に学生生活を送つてゐるようで大変
羨しく思います。勉強のことですがそれが
今頃非常に、むずかしく底の深いものだ
いうことを、身に還みて感じる様になりま
した。もちろん、高校の時のように高感法
勉強して感じるむずかしさとは違つたもの
です。しかし、最近考えることです。が、小
生、youと違つて、経済学ではないが、大学

場と言ふもの

伴 金美

場の需要と供給と質の関係でもって、小
生にとつては偶然に、大学市場の理論では
然るに、名大農学部農芸化学科という所
を通過することになったが、これは小生に
つて極めて幸せであつたと思ふし、自分
のツワリだと思ひます。客観的にみれば、
人のことではない、例のあとづけり自己正
義かも知れない。マジシャンでは許され
ないが、さういう意味では今年に順調に
いは学部に進めるので、東進に勉強しよ
と思ふし、ヤル気があります。もちろん
身体に対して投げかけられてゐる幾つ
問題提起も自分なりに考えながら、
つもう話もあるが、案外近くに住んでい
ながら互いに忙しいせいか、なかなか会え
ないが、今年はどうしこまめに筆をとる
つもりです。なにぞ御指導願ひます。

一月一日

「井の中の蛙」と言ふたとえがあります
。かりかにとつこの場は、すなわち、「井」
です。これを無知だと言つて笑う人間は、
自分の場が井戸を包含してゐると信じて
ゐるからミと笑ふのです。ミミゴ人間は、
暗黙のうちに包含関係こそが価値尺度であ
ると考えます。しかし、一般に人間たちは
包含関係を価値尺度とみなさうか。
そもそも人間にとつこの場と言ふものは、
何なりでしょう。か。おとろく、場と言ふも
のは、自己の意のままに支配できる空間で
はなりでしょう。人間は勝手気ままに自
己の存在する場を決定してしまふのです。
つまり彼等の価値尺度とは、まさに自己の
ものなりなのです。自己の存在が、すなわち
その場の価値ある証拠なりです。自分が
いない場と言ふものは、すなわち価値のな

の場なりです。場の最小単位は、孤独と言
うことです。孤独は、自我の統一がなされ
ているかぎり、ぜったいに意のままになる
世界です。だから、人は都合が悪くなる
と、たんに孤独へと、場を縮小します。そ
のくせ、人間は、つねに場を拡大しようと
や、きに努めます。そして、かわずなごを
もりやり、自己の場に引き出して、かわず
場が、自分の場に包含されるのを見て、自
己の普遍性を謳歌します。つまり、人間は
、自己という崇高な価値の存在しうる空間
を、場に設定し、その中で、初めて、包含
関係を価値尺度の原則とするのです。

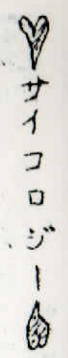
もっとも、迷惑なのは、かわずです。も
りやり人間様の場へと、引きずり出され、
その上、彼の場が、人間様より小さいから
と言って、「ためた奴」と言う、烙印を、おさ
せ、てしまうのです。迷惑なのは、しかし、
かわずばかりではないかもしれません。人間
自身も、もりやり他人の場へと、引きずり

最大の場であり、それ以上の場は、現在の
ところでは、存在しないと主張します。とし
て、このことを確信して、自分が、あざ笑ひ
の対、象であることを忘れて、自己の場に
於ける、包含要素を、笑い続けるでしょう
。もちろん、知って、いるからと、その
まねをしたいと言ふ人もあるでしょう。
しかし、とにかく、人は、自己の場の正当
性について、なんらかの理屈を付けて主張
します。

その点も面白い、あざけりの連鎖が、こ
に生まれます。その場々、現象的な形態と
しては、ある人にとつては宇宙かもしれま
せん。世界がもしもありません。国家がもし
もありません。大学がもしもありません。学生がもし
もありません。セクトがもしもありません。あざ
けることは、結局、あざけりをするということ
です。そして、知らず知らず、その連鎖の
中に組み入れられ、行く行くかもしもせん

出されてしまうかもしれません。たとえ、
崇高な価値を持つ自己の存在空間としての
場に於いて、包含関係の価値原則を、謳歌
しても、その人間自身が、まことに別の人間
の場に、知らず知らずのうちに、引きずり
出されて、いるかもしれません。かわずを、
あざけらう、た人間も、又他人の場に於ける
包含される存在として、笑われることにな
るのです。人間は、そこで抵抗します。言
わねば次元が違ふと。しかし、かわずは、言
葉をしややることはできず、ただ、だま
っているだけです。

しかし、他人を包含物にした人間も又、
別の人間の包含されることになる、てしま
うかもしれません。かわずは、やはり静か
です。しかしこの時、人間は、お互いに、
ののしりあい、戦いを始めるのです。かわ
ずをあざけつた人間が、他人をあざけるの
は当然でしょう。人間は、あざけりをする
さけるために、自己の存在する場ミとが、



サイコロジ

西川 洋

世はまさに心理学ブームである。(少くオ
ーバー表現かあ?)。町の書店には、
人間の行動の心理学的メカニズムをやさし
く、面白く書いてある本が大抵二、三冊
は見かける。この本の読みかた、たまたま
用書みかたに、この本を読むと、たまに
にして人間心理がつかめるような気がする
最近では、本を読まなくても、テレビによ
る興味本位の心理学的事象の説明が、さ
らなる。ここの説明は表面的で一義的
内容が乏しく、かえって心理学を誤解さ
受けとめているのではないかと少々不安に
思われる。

そこで、小生が日頃感じている心理学
に關して述べてみよう。

我々は心理学という学問について、簡単に
その内容を問われたい、次の様に答えるた
らう。即ち、「それは人間の行動を理論的に

まてよ、町中では、こんなもの見えるはずがない。よ。(↑だいたい、モウロウと書いて、ミミといる。)ウソを書いたはいけな。と小僧のときにならうたぞ。どうしようか。

そのとき、三ハ本目のマツナ橋がパンと折れた。―すなわち、マブタが切れてしまったのである。

(一月31日深夜)

カノ

「本居宣長と私」(一話) 保根屋酢芽

(本名堀井次雄)

向を譲ろう、実をいうと私は「本居宣長」と大いに関係がある。江戸時代のあの有名な国学者が古事記伝を著した「本居宣長」である。驚かされる方もあると思われるが、このことは真実なのだからし方ない。

去年の暮れ方、餅をつくために我が家に残る家系ともいうべき白を取出したところ、ふし誤って割ってしまった。これが真実を知る手がかりになるとは誰が予想したであろうか。その底には文字らしきものが刻んであった。何だろつかと思ひ近ま、く見たが、もはや私には理解できなほどくずれており、文字自体も草書であった。そこで我が家に残る古文書を少しばかり調べている近くにいた父を呼んで読んでみた。その文字には、「贈、本居(保根)富良、宝暦拾参年」と判断された。どうし

……「マ」という字が刻んであるのが一瞬疑問に思った。「本居」という姓はどこから来ているのであろうか。何もかもあやうな暦拾参年は西暦で何年にあたるのかを調べた。それは一七六三年であった。そこで「マ」とした。「本居」という姓は、当時我が村の近くの松阪で庶務を司業つて、日本古典文学を研究していた「本居宣長」に

関係があるのではないかと。あまりにもそれには現実離れしていると思われたので、今度は「富良」という名前を調べた。みることにした。

我が家の家系も調べた父に当たって、みたところ、やはり江戸時代中期には「宣長」といふ人がいたらしい。そうなるとして「本居宣長」といふ人は我が家の家系といふことにはなる。しかし注目すべきことは、その「富良」といふ人が養子であるといふことである。当時の我が家の主、四左衛門といふ人と養子といふのは、よく知られた

養子を迎えたといふことが現存残っている書から出ている。そうなるとして「富良」なる人物の生家はどこなのだろうか。父もい

ついろ調べたら、いがかねなかつた。

……、まさかと思いつつも、「本居宣長」について調べた。享保十五年(一七三〇)の年、松阪の商家に生まれ、白く記されて「本居宣長」は、「宣長」がこれと国学者である賀茂真淵と初めて松阪で会った年である。次に大変なことを発見した。「宣長」は初名を「富良」といひ、後に「栄」と改更したといふことである。「富良」の「富」と「栄」の「栄」の文字を合わせると、まさかあの「富良」といふ名がでるのではないか。果してそれは邪推であろうか、それにはあまりにもつまずかぬ。しかし、「宣長」の子孫には「富良」といふ人物はいない。それでは「宣長」と「富良」は向の關係もなければ、

子供は、前野という住所の祖頭の所に養子にだされ、いたことが明かになった。

これで我が家と「富貞」と「宣長」との關係は明瞭となった。というのも我が家は伊の首前野という村にあり、しかも当時祖頭をくみたのはまさしく我が家であつたから、「宣長」の甥「富貞」が我が養子になったことはこれで明白になった。

以後、「富貞」の血が現在まで我が家に流れ、あり、私もその一員である。それにして我が家に何故「富貞」が養子に采たのかは、もはや知る術はない。

締め切り日を過ぎた。以上のよう「原稿」を書き終えた作家保根氏は一息入れた。

「マツガカー・マツガカー」という声に、と目もたました保根氏は、急いで電車を降りた。変な場をみたなと思ひながら。

掘井次雄

眞珠イカダ・伊勢エビ・海女・御木本・イルなど有名な伊勢志摩国立公園の一帯志摩へ去年の暮れに行つてきた。大玉橋のある長打ちの近くの小どんよりとした村に五日間は滞在した。その村も御多分、もしも眞珠業者が多いが、この二、三の過当競争のあおりを受けて倒産するところもある。しかし大規模にやつてゐる業者は眞珠不況に耐えるものばかりでなく、むしろいい。やはり大企業の実力である。

まずここに來る感じだのは、蟹が盛んなる。農村で育つた私には、都会のどろどろした落ちつかない雰囲気・林立する家屋・空間のなさ・緑のなさ・なにより、極度に圧迫感を感じさせられる。その沿岸を歩いてると心が休まる。速くはながら蟹が海見られ、黄土色をした岩層・冬という

に青々としてゐる松・入り江に浮かぶ貝珠イカダの黒いブー・これらのコントラストは誠にすばらしい。視聽の状態になりいつまでたがめつても飽きることは来ない。おりからの微風に波が白いで、なみを立ち、岸辺に向かうその様子は、季節代の昔と少しかわりぬ馳を感ぜしめる。

石を数個力いっぱい投げた。遠くにとんだように少しもみえず、すぐ前の海に吸い込まれてゆく。完全に自然の勝ちである。人間にとつて海はあまりに偉大すぎる。少しも手ごころを加えずに、それどころか岸に向かつて侵食作用を絶え間なく続けられている。

浜には、切り干しを使うために、小さく切ったサツマイモがたぐさん干してある。賑かい日の光を受けて、いかにもうまいやうである。このような光景もそのうちに姿を消していくだろう。

時おり自動車爆音を轟かせて通りすぎた。

ゆく。ここにも文明の利益テシが表われてゐる。ひとときの自然の村落もすべからずだめになる。いつまでも静かにしてゐてはいい。という私の望は現実にはもはや無理難題であろうか。せめて休息地づくりは静かにしておいてもらいたいものである。

現存、志摩地方は観光地として重要視されつつあり、交通の便も漸次増え、さうして、ホテルもいたる所が建ち出している。眞珠イカダも眞珠を作るイカダよりも、むしろ、観光用のイカダとなりつつある。不景も倍せば、たぐさんの人が志摩方面に來るだろうが、そこでもたぐさんのは自然の破壊のみである。土地ばかりではない。そこに住む素朴な人までもが都会化してしまふ。恐れは十分にあり。このよう「現象」は全口にたる所で見られるであらうが、何とも残念なことである。早急に自然の保護をはかりね、大変なことをする。

を考へるのは前の「何故……」という肉を
発するのに似ていると思う。

しかし、自分が「何の為に生きまいる
のだらう」と考へることは全く無価値とは思
へない。少なくとも、現世の至んだ価値
意識を再び考へ直す有力な手段であるから
だ。その中から正められた、または捨てる
れた本當に大切なもの、矢いにかけていたし
のを取り戻すことができればと考へる、から
である。それは矢いにかけていた人同様の回
復にも通がるかもしれない。現代生活にお
いて「何の為に……」という肉。その肉を
抱えていた人はもう一度肉に返し、回りの
世界をいろいろの角度から見る必要が
必要だ。ここで誤解のないように言ふ
わくのは、その肉はあくまでも自分の中に
多く、重苦しく着むものであり、他人に對
して向うべき性質のものではなく、現在所
で向うがされるように、他人の欺瞞をあげ
たり、ある觀念を強制的に身かせるため

自然を破壊する方向に進んでいるからで
ない。
私が観光地を訪ずれて一番目につくのは
お土産屋である。観光対象物、それは、
吾などの名前旧跡である場合が多いが
それを中心にしてお土産屋が道の左右に
あつては回りにずらりと並んでいるので
ある。お土産屋というのは、文字通りの意味
ではその土地特有の産物でなければな
ないはずである。お土産屋に入つて物色
していると、「お土産」にふさわしいもの
がやたら目につく。二、三あげてみると、
けしきであり、まんじゅう、ようかん等の
菓子類などは典型的なものである。別に違
つておいた、ていじやないか、そんなも
のやなきやいんだよ、とさう人がいる
と思うが、私にとつてお土産屋はあくまで
土産屋であり、デパートであつて欲しく
のであつて、もう一つお土産屋に關して
ひらいて、それは「お土産屋が呼び込む

に使つたのではないと考へることをここに
確認します。

このような文章を書いたのは今日の現在
の欺瞞性をかくすためであらうか……？

最後に、四年間ばかりクラブをこえ
て来られた梶浦、西川両先輩に對し、他か
ら感謝の拍手を送るとともに、両氏の御事
業をお祝ひ申し上げます。

自然が欲している

高木一三郎

東海道自然歩道が数年後に完成するら
しい。今からいふと、必しけであるが、又不
安も感ぜざるを得ない。なぜならこの道を
観光事業に役かわせようともくろんでい
る人達がいろいろにちがいないからである。私
は決して観光事業を否定する気はない。私
が現在の観光事業を嫌悪するのは必要以上

をやつているのである。所でみかけるバナ
ナのたまたま売りのそれである。本来物を賣
うというのは、欲しいから買つのであつて
買わせるものではないはずである。もちろ
んどうしても欲しくないものはいくら強
いられても買わないであらう。しかし強いら
れて買つのはいやな気持ちである。とくに觀
光地に来てもそんな目に会いたくない。
お土産屋というものが初めどのような形
で現われたのか知らないが、想像してみ
ると恐ろしく、農家の人達が片手間に作つた
の土地の産物を宿屋において売つたのが最
初ではないかと思う。いや、売つたのでは
なく、その土地を訪ずれた旅人達に記念と
して提供していたのかもしれない。せつか
く都会の雑踏から脱け出したくて静かな寺
に来てゐるのに、「さあいらっしゃい」な
くて呼び止められると、夜店ならまだしも
全く興ざめである。熱海城というのがあ
るらしい。また雞の城であつたかなく

ひねる暇はならない。そんな城はもちろん
歴史に存在しないことは言うまでもないが
ある日突然昭和の世の中に現れた、い
わゆる観光地である。この類いの観光地は
まだ他にもあるらしい。これはまさに観光
事業家の仕事である。彼らは観光地を都会
化しようとしているのであり、その目的こ
とで人を集め、金を集めるのである。私の
言っている観光地は、都会の観光地、おの
ほりさんの観光地ではなくて、都会から離
れた観光地のことであることはおわかり
なると思うが、そのような観光事業家が、
東海道自然歩道を足のかすはすがない。私
は、まさにそこに不安を感じるのである。
東海道自然歩道がこのような人達のえじ
きにされてはならないであらう。私達はな
にもアスファルトの道や、しずれた休憩所
が欲しいのではない。自然がありさえすれ
ばいいのであり、土と水と木があればいい
のである。私達の日常生活に自然は入り
込めようまい。

込め余地はなくなっている。自然は三
分の外にしか見えない。自然はなくなっ
て、人間の反動として現代人は自然を求め
てきた。私達はすすんで自然を求め
てきた。あらためて自然の良さを知ろうと
している。自然の力は恐ろしい。人類の歴史
は自然との闘いであり、それは今なお続
いている。自然は洪水によって、地震によ
り破壊されてきた。森林は、死んだ木のよ
うに積み重ねられ、その重なりは地震にも
天にもとくばかりである。私達の先人は
そして私達は、常に自然を克服しようとし
てきた。しかしそれとともに多くの恩恵を
享受してきた。自然を破壊してきたのである。
克服するからには破壊は必要である。た
う。しかし必要以上の無計画な自然の打
つ。これらがなされたのである。それはかり
ではない。自然を破壊して、人間に私達の自
然を奪う代も破壊され失ってしまっている。
ではないだろうか。機械文明の発展は、

自然
しぜん
SHIZEN
NATURE
NATURE

研究 抄

桶狭間古戦場の謎

西川 洋

この論文は、昭和四十一年に名古屋市中教
委員から出された桶狭間古戦場調査報
告に基づいて、又土地の郷土史家の意見を
参考に、まとめたものである。

桶狭間の合戦は歴史上有名な戦であるの
に、御存知の事と思う。即ち、
約四百十年ぐらゐり前、永祿三年（一
五六一）五月、今川義元が上洛を決意して
河、遠江、参河の兵を動員し、尾張の地
を通過したが、織田信長の奇襲の前に、
さくさくとの夢をくじかれた。これがまあ
桶狭間合戦と呼ばれるものである
この天下布目の戦にも拘りなく、古く
義元戦死の地、或いはその主戦場につ

いて諸説があり昭和十二年、文部省は愛知
郡豊明町大字栄南館の地を伝説史跡として
指定したけれど、この水はあくまでも伝説で
あり、定説とは未だ言えない状態である。
何故なら、桶狭間合戦に關して現存する史
料のうち同時代に作成されたものは、ほと
んどなく大部分後世に作成されたものにす
ぎないのである。又今川家では、代々前主
の中陰のうちに記録されて、前代に傳へて
してまとめられた慣習があったが、義元につ
いては故意に欠陥した感があり、事蹟を知る
ことができないのである。こういふ状態
の中で、現存する史料のうちでも、その信
頼できるものとされ、これに依る太田和泉守一
の「信長公記」がある。彼は天永七年（一五二七）
生まれ、天文（一五五〇年代）の末年頃から、
織田氏に仕えていて桶狭間合戦の時は、三
十三才の働き盛りで当然戦場にも出ていた
ものと思われる。その記事はかなりの信憑
性があるものである。次にこの記事の中から

戦場の位置を定めるうえで必要と考えら
れるのを抜粋してみよう。

今川義元は四万五千引率し、おけは
山より馬の休息を在る。午刻、戎亥に向
て、諸を三番うたはせられたる由候。

山際迄御人教被寄候又、俄急雨
水を投打様に敵のつらに打付る。身方ハ
方二降か、余の事に熱田大明神の
方かと申候也。空暗るを御覽し、信長鏑

取て大音声を上て、すハ懸レカ、水と
黒煙立てカ、るを見て、水をまくる
とく後へくは、と崩れたり。鏑鉄砲

をもち、物を乱すに不異。今川義元
も槍を捨て崩れり。旗本ハ是也。こ
か、水と御下知有。未刻、東へ向て分
給ふ。初ハ三百騎計、真如にも、義

合、次第次第に無人に成て、後にハ五
百計に成たる也。（中略）毛利新介、

義元を代取、頭を取。（中略）おけはま
と云所ハ、はまきとてみ深田足入、高ミ下
ミ成り、節所と云事限りし。この記事

から手掛りとなる地名、方向、地形、時刻
等を要約すると、(1)義元は「おけはま山」に
人馬を休息させた事。(2)午刻（正午）に戎亥
（西北）に向つて人数を整えた事。(3)信長軍

が山際まで軍勢を寄せた時急雨が降る事。
(4)雨は今川方の正面に向つて降り、織
田方は背面にうけて攻撃し桶木が東方へ倒
れた事。即ち、今川方の陣は日方西方まで

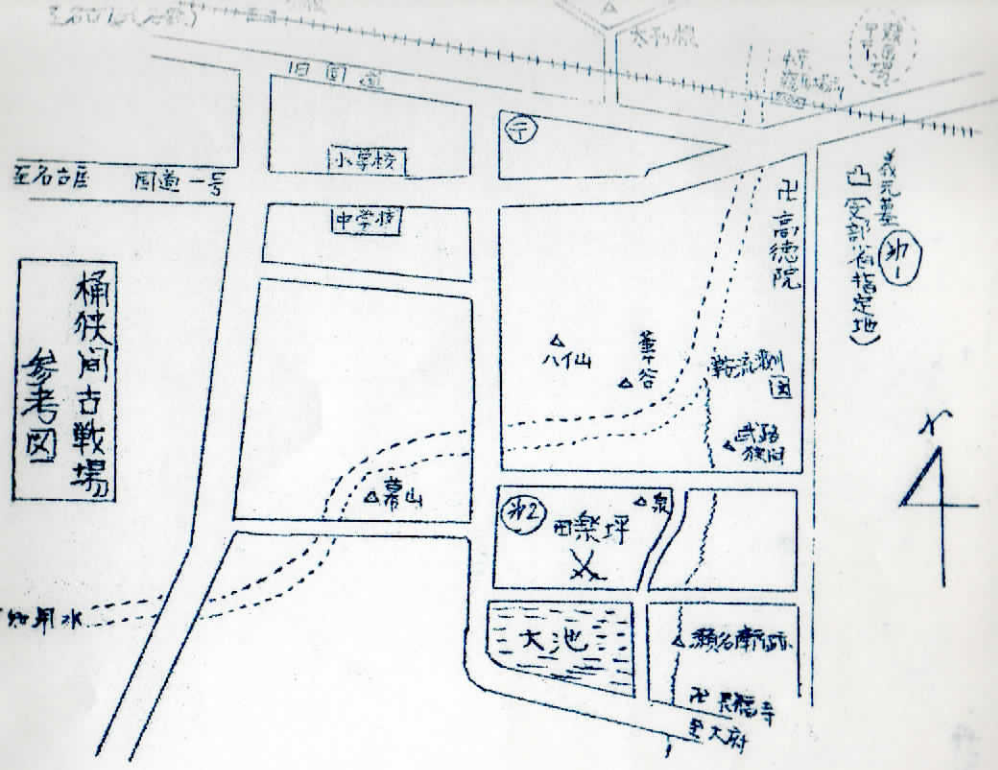
織田方は日方東向きに攻撃した事。(5)義元
の鎧を捨て後向へて崩れた事。(6)義元
の旗本陣を攻撃した時刻は未刻（午後二時）
で東へ向つた事。(7)三百騎ばかりで取回

んで退いたが五百騎ばかりとなつた。天明義元
は戦死した事。(8)「おけはま」は狭間とな
つていて、くみ（低湿で水草の生えた土地）
であり、深田は足もとら水、高み低みの茂

た節所（節所、難所の事）である事。以上の

八五を更に要約すると、はじめに休息した
 場所はおけはさま山であるが、東方へ逃げ
 た、そこで戦死し、場所は低湿地である。
 即ち、この記事によると義元はおけはさま
 山で休息をしたというわけであるが、一休
 おけはさま山とは何であるか。即ち、お
 けはさま山か、おけはさまの山のどきうに
 も考えられる。蓮左文庫蔵桶狭間図に桶狭
 間山という山名は記載されてゐるが、この
 山が戦国時代にも桶狭間山と称してゐたか
 は不明である。この記事だけでは不十分な
 ので別の史料を検討してみると、家康の側
 匠の松平家忠の日記があげられる、これに
 よると、信長、善照寺にニテ、兵ヲニ隊ニ
 分ケ、旗ヲ巻キ列ヲ潜メ、義元ノ陣ノ後ノ
 山ヲ廻テ窺ヒとある。又、寛永元年(一六二〇)
 生水の山澄英光の桶狭間合戦記によると、
 旗ヲ巻キ兵ヲ潜メ、中島ヨリ相原村ヲカ
 ケリ、山間ヲ経テ、太子が根ノ麓ニ至ル。
 (中略)信長、太子が根ヨリ急ニ田楽峠ヲ取

掛……とある。……この問題等は、太子
 が根ヨリ急ニという事であるが、山上より
 一気に、いりゆる逆落しに駆け下ったかど
 うかというところである。もしそうである
 う、義元の本陣は直下でないまでも、ごく
 近接した地域即ち太子が根から程遠くない
 地域であるというところか言える。又、知
 多郡桶狭間合戦申伝之書によると、(義元)
 桶狭間谷へ揚り給ひ、峯にて兵當被遣、申
 略)西より登ったにおしよせ。時の声を
 上給ひ……とある。以上の点から考えると、
 義元の本陣は太子ヶ根の直下ではなく、し
 かも或程度の高所であつたと推定される。
 以上は義元の本陣の位置から古戦場の場所
 をアプロキシメするものであるが、次に義
 元の戦死地から古戦場の位置を確かめてみる。
 何故なら、信長の奇襲作戦で不意を襲われ
 た義元本陣は逃ける暇なく全滅し義元もそ
 の場で討ち取られたと推察される。よつて
 義元の戦死の地を正確にたどれば、自然と



古戦場の位置もわかつて来るのではないだ
 ろうか。現在、愛知郡豊明町大字栄宇南
 館十一番に明和八年(一七七二)十二月建立の「今
 川上総介義元戦死之所、松井八郎家或云五
 郎心、士隊将家、五箇の桶狭と石表を以テ
 め文化六年(一八〇九)撰文、十三年建碑の「桶狭
 間古戦場」とある。この場所が義元の戦死
 地であると考えるのは、明和八年建碑から推
 してまるのではなく、寛文四年(一六六四)の「道
 中回文図念、同九年、後入東海道中記にも、今
 川義元さいご所として記載してゐる。又江
 戸時代にはその土地の村民も、これを義元の
 戦死地として認め毎年五月十九日には盛大
 な念仏廻向が催されてゐた。この結果に基
 づいて文部省が一応この地を伝説指定地と
 した。しかし従来、この地に關して異説が
 あり、その中現在の義元の墓より西南約
 一kmの瀬名伊予守氏後陣地附近というのが
 有力であるが、この説の一番の根拠は義元

である。もちろん桶狭間のどこかで戦死した事はまちがいないことであるけれども、この説の根拠につけて述べるに瀬名伊予守氏俊というのは、義元の同族で本陣旗本で四元では常に瀬名殿と呼ばれ義元とは特別の別当であつた。この氏俊は東軍の監視隊として以前より此の地に駐屯してこの附近の事情にあかきはずであつた。だから、義元は附近の地理にあかきこの氏俊に会つて本軍の休息所を定めたのが当然の事ではなかつたか。そこで氏俊は、自己の陣地の北辺の田楽坪を指示し早速附近の土民を集め仮りの陣所を急造して本軍の仮営に供したものである。

以上が、瀬名伊予守氏俊の陣地・即ち、田楽坪が義元が戦死地としてゐる主要な根拠である。しかし、たとえこの田楽坪が陣所とたとしても、そこで義元が討死した保証は何もないのである。そこで戦が行なわれたという事実があつたとしても。

特別寄稿

郷土研究会に寄せて

名大教育学部教授 結城 陸郎

西川君から、さうしたサークルのあることを聞いて、大変すがすがしい感を覚えるとともに、サークルの諸君と一度お目にかかつて、お話しを聞いてみたいな、という気がしました。同君の話によると、随分あちらこちらで城郭や城址を訪ねられたり、文献研究も進んでいるらしいので、文字通り話しを伺ひ、身もまてもらいたい。気にとらふ水るゆけです。ゆたくは現在、日本教育史の道を歩き、愛知県教育史、郷土の事業にもタッチしてゐる関係上、城郭史や美術史とは大分縁遠い生活を続けています。が、もともと文化史や美術史にも関心をもつてゐたので、昨今でも遠く、脚をのびし、古手、仏像などに見入つて、

そして、又前にもどるけれども、文部省指定地になつてゐる古戦場に於ても、前に述べたとうり、義元の墓碑があるからといふ、これもそれは義元の戦死地を保証しないのである。

この奥がもつ、と今後の研究に残された課題は何かあるうか。

美しさを通して、そとに古の人々の生活と心の奥に漂う豊かさに魅せられたり、手許にある図録などによつて時を過すことも、しばしばです。サークルの諸君のお話しを聞いて、新たな手だてを与えてもらえ、さらには明日への生き方の道標が示されるように思えます。

ともあれ、あなた方のサークルが楽しい集りであり、さらに発展することを期待します。

會計部 → 鈴木 → 堀井 → ?

野上明迎
賀志敏
伊活同生
「復英入」
くは式木新相
行マ形日「
へー「「き
祭ラタ米バ
大の一訪す反
女年亦謙念成鎖

4月 8日
19日
25日
26日
5月 29日
9日
*
17日
*
24日
*
6月 2日
3~8日
*
*
*
21日
27日
29日
*
7月 19日
8月 21日
9月 *
18日
0月 *
4日
25日
1月 1日
*
*
22日
*

